

# 千葉県向ノ台遺跡Ⅱ

－宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書－

2016

有限会社 新井トラスト  
公益財団法人 千葉県教育振興財団



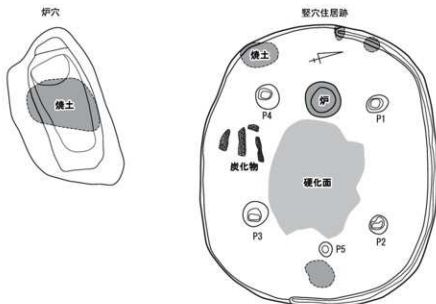
## 例 言

- 1 本書は、千葉市中央区都町1117番20に所在する向ノ台遺跡の宅地造成に伴う発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査および整理作業は、有限会社新井トラストの委託を受け、千葉市教育委員会生涯学習部文化財課の指導のもと公益財団法人千葉市教育振興財団が実施したものである。
- 3 発掘調査の期間・面積・担当者は下記のとおりである。  
期間：2015（平成27）年10月1日～10月27日  
面積：250㎡ 担当者：塚原勇人
- 4 整理および本書の製作・編集は、塚原と小林嵩が担当して行った。
- 5 整理期間は、2016（平成28）年1月13日～2016（平成28）年3月25日にかけて行った。
- 6 遺構・遺物の撮影は塚原が行った。
- 7 本書の執筆は塚原が執筆した。
- 8 弥生土器と土師器の観察は小林が行った。
- 9 縄文土器と瓦石の観察では、西野雅人氏（千葉市教育委員会）の助言を得た。
- 10 有角石器と第20号竪穴住居跡出土の磨石類の実測は、佐藤洋氏（千葉市教育委員会）が行った。
- 11 有角石器、雑芥、磨石類の石材鑑定では、柴田徹氏（考古石材研究所）の助言を得た。
- 12 出土資料・調査記録等は千葉市埋蔵文化財調査センターで保管・管理している。
- 13 発掘調査から報告書刊行まで、下記の諸機関の御指導・御協力を賜った。  
千葉市教育委員会生涯学習部文化財課 有限会社新井トラスト 株式会社クガテクニカル興業

## 凡 例

- 1 本書に掲載した遺構図等の方位は、公共座標の北を基準としている。
- 2 土層及び遺物の色を記号で示している場合は、農林水産省監修「新版 標準土色帖」による。
- 3 竪穴住居跡の平面規模は、炉を通る軸線とこれに直交する軸線との長さを示す。柱穴は4基の主柱穴を炉右側のものをP1とし、時計回りにP4までとした。炉対面壁側の出入り口に関連するものをP5とした。
- 4 本文中の挿図の縮尺は原則として以下のとおりである。  
遺構実測図：1/30・1/40・1/60・1/150 遺構配置図：1/1,000・1/300  
遺物実測図：土器1/4・1/3 石器1/3・2/3
- 5 遺構・遺物の図面はAdobe Systems社製Adobe Illustratorで編集作業を行った。
- 6 遺構・遺物写真はデジタルカメラで撮影し、Adobe Systems社製Adobe Photoshopで編集作業を行った。
- 7 第1図は、国土地理院発行の2万5千分の1地形図より作成したものである。
- 8 遺構配置図・遺構実測図では、調査区名称他を下記の通りの略称で表記している。  
第1調査区＝1区 炉穴＝炉 土坑＝土 竪穴住居跡＝住 溝状遺構＝溝

遺構凡例



## 目 次

第1章 向ノ台遺跡の概要	1	3 古墳時代	17
1 遺跡の位置及び周辺遺跡	1	4 中・近世	17
2 過去の調査	1	5 遺構外出土遺物	29
3 調査の方法	3	第3章 まとめ	30
第2章 遺構・遺物	6	写真図版	
1 縄文時代	6	抄録	
2 弥生時代	10		

## 表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧表	2	第5表 出土遺物観察表3	26
第2表 出土遺物集計表	9	第6表 出土遺物観察表4	27
第3表 出土遺物観察表1	24	第7表 出土遺物観察表5	28
第4表 出土遺物観察表2	25	第8表 出土遺物観察表6	29

## 挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図	2	第9図 遺構外出土縄文土器	9	第17図 第20号竪穴住居跡2	19
第2図 周辺地形図・遺跡範囲図	2	第10図 第21号竪穴住居跡	11	第18図 第20号竪穴住居跡3	20
第3図 昭和21年度調査位置図	3	第11図 第22号竪穴住居跡1	12	第19図 第16・17・18号溝状遺構	22
第4図 遺構配置図1	4	第12図 第22号竪穴住居跡2	13	第20図 第19号溝状遺構	23
第5図 遺構配置図2	5	第13図 第23号竪穴住居跡1	14	第21図 第42・45・46号土坑	23
第6図 第15・16・17号竪穴	7	第14図 第23号竪穴住居跡2	15	第22図 遺構外出土遺物	23
第7図 第43・44号土坑	8	第15図 第23号竪穴住居跡3	16		
第8図 竪穴出土縄文土器	8	第16図 第20号竪穴住居跡1	18		

## 写 真 図 版 目 次

図版1 遺跡風景	第22号竪穴住居跡遺物出土状況1	第17号溝状遺構
調査区近景	第22号竪穴住居跡遺物出土状況2	第19号溝状遺構
図版2 第11調査区全景	第23号竪穴住居跡	第45号土坑
第12調査区全景	第23号竪穴住居跡遺物出土状況1	第46号土坑
第15号竪穴	第23号竪穴住居跡遺物出土状況2	図版5 竪穴・遺構外出土縄文土器
第16号竪穴	第23号竪穴住居跡遺物出土状況3	図版6 第21・22・23号竪穴住居跡出土遺物
第17号竪穴	第23号竪穴住居跡遺物出土状況4	図版7 第23・20号竪穴住居跡出土遺物
第43号土坑	図版4 第20号竪穴住居跡	図版8 第20号竪穴住居跡・第17号溝状遺構・遺構外出土遺物
第44号土坑	第20号竪穴住居跡遺物出土状況1	
第21号竪穴住居跡	第20号竪穴住居跡遺物出土状況2	
図版3 第22号竪穴住居跡	第16号溝状遺構	

## 第1章 向ノ台遺跡の概要

### 1 遺跡の位置及び周辺遺跡（第1表、第1・2図）

向ノ台遺跡（第1図1）は、千葉市の中央部を東西に流れ東京湾に注ぐ都川下流域右岸の標高約18mを測る台地上に位置し、その範囲は千葉市立都小学校の敷地を含めた広範囲に及ぶ。

本遺跡が立地する都川下流域は、国指定史跡の荒屋敷貝塚（第1図10）をはじめ数多くの遺跡が存在し、縄文時代中期から後期にかけての大型貝塚の密集する地域である。

本遺跡の周辺には、南東へ約200mの地点に縄文時代早期後葉の竪穴住居跡と弥生時代中期後半から古墳時代前期の方形周溝墓を検出した辺田遺跡（第1図2）、北東へ約200mの地点に古墳時代後期の古墳と中世の屋敷跡を検出した都町・山王遺跡（第1図3）、北東へ約150mの地点に縄文時代の包蔵地である松原遺跡（第1図4）、北東へ約500mの地点に古墳時代中期の集落跡である蛤谷津上遺跡（第1図5）、南東へ約500mの地点に古墳時代前期の集落跡である和田前西遺跡（第1図6）などが所在している。

### 2 過去の調査（第3・4図）

#### （1）昭和21年度

東京大学人類学教室と県立千葉中学校（現千葉高等学校）郷土研究部が、都小学校旧校庭内で調査を実施している。調査期間は1946（昭和21）年12月23日から1947（昭和22）年1月6日にかけてである（註1）。調査の記録は、千葉中学校校友会誌『かつらぎ』に記載されている（註2）。

旧校庭内には3ヶ所の地点貝塚が点在しており、調査は北側のA地点と東側のB地点で実施している。調査面積は100㎡である。調査の結果、両地点で縄文時代早期の地点貝塚、B地点で埋葬人骨を伴う竪穴住居跡1軒を検出した（註3）。

竪穴住居跡は貝層下から検出し、その規模は長軸6.8m×短軸3.8mを測る。平面形は不整形を呈し、柱穴は4本の主柱穴と壁直下に2本を単位とした支柱穴を有していた。床面から2体の屈葬人骨と鹿の骨が出土した。

縄文土器は、早期後葉茅山式を中心に、その他に田戸下層式・子母口式・諸磯式が出土した。貝層はハイガイ・マガキ・ハマグリが主体を占めていた。以上の資料と調査記録の所在は、現在では明らかではない。

人骨は、A地点で2体、B地点で2体の計4体が検出した。この人骨は、東京大学人類学教室に保管されており、『千葉県の歴史』編纂時に再鑑定されている（註4）。

#### （2）平成21・22年度

財団法人千葉市教育振興財団が平成21・22年度に調査を実施した（註5）。調査面積は8,000㎡である。調査の結果、遺構は縄文時代早期後葉の炉穴14基、縄文時代の陥穴2基、弥生時代後期～古墳時代前期の竪穴住居跡17軒、古墳時代中期竪穴住居跡2軒、中世の台地整形区画1ヶ所、土坑39基・地下式坑12基・溝状遺構15条を検出し、遺物は縄文時代早期後葉の貝殻条痕文系土器、前期の関山式・諸磯式・浮島式、弥生土器、土師器、中世陶磁器類などが出土した（註6）。



第1図 遺跡位置図

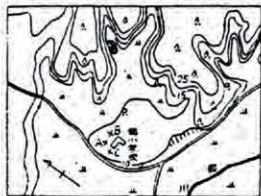
No.	遺跡名	時代
1	向ノ台遺跡	縄文(早)、弥生、古墳(前)、中世
2	辺田遺跡	縄文(早・後)、弥生(中・後)、古墳(前)
3	都町・山王遺跡	縄文(早・前・中・後)、古墳(後)、中世
4	松原遺跡	縄文、中・近世
5	蛤谷津上遺跡	縄文(中)、古墳(前)
6	和田前西遺跡	縄文、弥生、古墳(前)
7	貝堤遺跡	縄文(早・前・中・後)
8	干場遺跡	縄文(早・前・後)
9	台門貝塚	縄文(中・後・晩)、古墳(後)
10	荒屋敷貝塚	縄文(中・後)、古墳(中)
11	殿山遺跡	縄文(中・後)、古墳(後)、平安
12	車坂遺跡	縄文、弥生、古墳、奈良、平安、中・近世
13	大作遺跡	縄文(中・後)、古墳、平安
14	立木遺跡	縄文(前)
15	聖人塚遺跡	縄文(前)、古墳
16	立木南遺跡	旧石器、縄文、古墳、奈良、平安
17	田向遺跡	平安
18	田向南遺跡	縄文、弥生(中・後)、古墳、中世
19	和田前遺跡	縄文、弥生(後)、古墳(前)、中世
20	上和田遺跡	縄文(前)、平安
21	城之腰遺跡	縄文(中)、弥生、古墳、奈良、平安、戦国
22	高崎台遺跡	縄文(後)
23	星久喜遺跡	縄文(早・前・中)、弥生(中)、古墳
24	矢作三山塚遺跡	縄文(早)、古墳(前)、近世
25	井合遺跡	縄文(早・後)、古墳(中)、平安

第1表 周辺遺跡一覧表

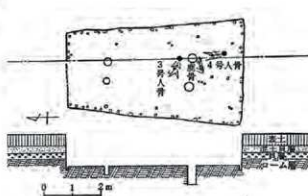


第2図 周辺地形図・調査範囲図

## 貝塚台向の地形、×は発掘地点



昭和21年度調査地点  
『千葉市誌』を引用・改変



昭和21年度調査B地点 竪穴住居跡  
『千葉市史 原始古代中世編』を引用・改変

### 第3図 昭和21年度調査位置図

炉穴と竪穴住居跡は、都小学校に隣接する調査区に集中して検出した。台地整形区画は、第2調査区北側の埋没谷周辺の台地を掘削してテラス状に平坦面を造りだした状態で検出された。

平坦面の内部と周辺には、土坑・地下式坑・溝状遺構を配置しており、都小学校東側周辺一帯は台地整形区画を中心とする中世遺構群で構成されていた。以上の遺構群は、出土遺物の時期と五輪塔・宝篋印塔・墓坑など墓域の可能性を示す資料が検出しなかったことから、15世紀後半から16世紀代の居住域と考えられる。

### 3 調査の方法 (第4・5図)

調査区と遺構の番号は、平成21・22年度調査の番号を踏襲した。遺構平面図作成と遺物の取り上げは、調査区が狭小なので、任意に5m単位のグリッドを設定し、このグリッドを基準として行った。調査の結果、縄文時代早期後葉の炉穴3基・土坑2基、弥生時代終末期の竪穴住居跡3軒、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒、中・近世の溝状遺構3条・土坑3基を検出した。

注1 遺跡の名称は、都小学校敷地内に存在していた地点貝塚を「向ノ台貝塚」(むこうのたいかいづか)、地点貝塚と合わせて台地上に展開する遺跡を「向ノ台遺跡」(むかえのたいいせき)と呼称する。

注2 千葉県立千葉中学校校友会 1947 『かつらぎ』昭和22年3月復刊号

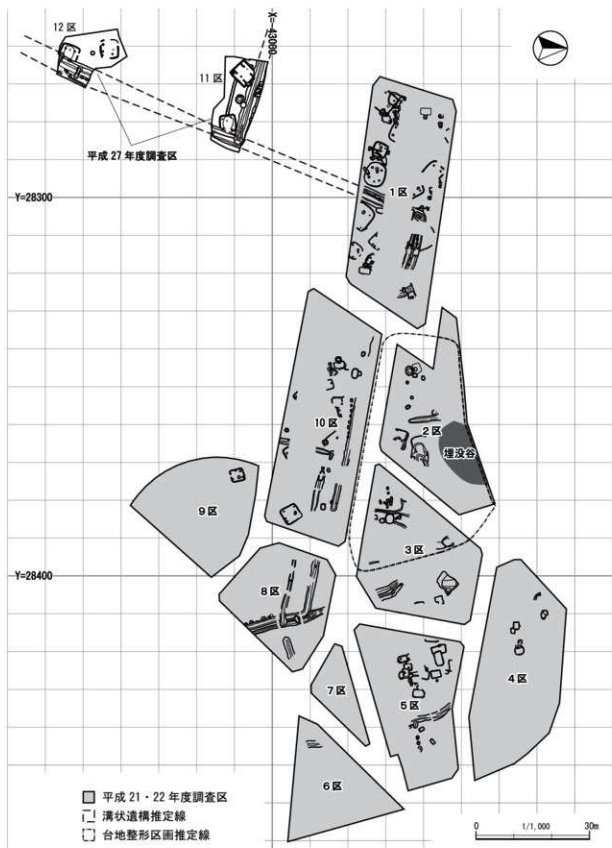
注3 千葉市 1952 『千葉市誌』

千葉市 1974 『千葉市史 原始古代中世編』

注4 (財)千葉県史料研究財団 2000 『千葉県の歴史 資料編 考古1 (旧石器・縄文時代)』

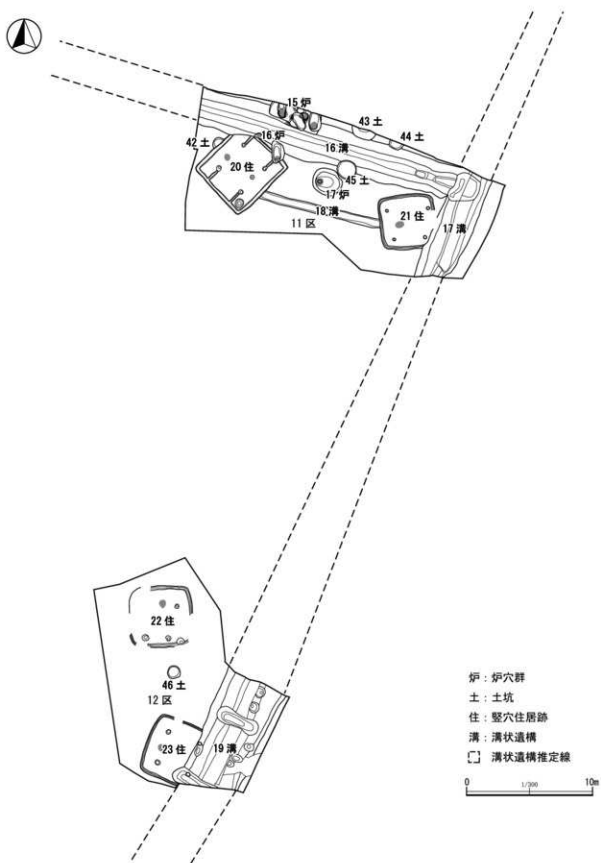
注5 (財)千葉市教育振興財団 2011 『千葉市向ノ台遺跡』

注6 註5の報告では、竪穴住居跡の時期は古墳時代前期と報告しているが、本報告の整理作業で出土遺物を再検討し、その結果、時期を弥生時代後期(5・9・13住)、後期-終末期(3・7・8住)、終末期(1・2・11・14住)、後期-古墳時代前期(4・10・12・15・17・18住)、古墳時代中期(第6・16住)に改める。



第4図 遺構配置図1





第5図 遺構配置図2

## 第2章 遺構・遺物

### 1 縄文時代（第2～5表、第6～9図）

#### （1）概要

検出した遺構は、早期後葉の炉穴3基、土坑2基である。全て第11調査区から検出した。

炉穴は、複数の火床部が認められた場合でも、まとめて一つの遺構番号で調査を実施しており、本報告もこれを踏襲している。第15・16号炉穴は、同一遺構と考えられたが、中世の溝状遺構に分断された状態で検出したので、各個別の遺構番号を付して調査を実施した。また、本報告では図示しなかったが、調査区内からは、被熱の痕跡が認められる礫が合計285点出土した。炉穴に関連するものと考えられる。土坑は炉穴の掘り込みの一部である可能性が高いが、調査では火床部が確認できなかったため、土坑として報告する。

#### （2）炉穴群

##### ①第15号炉穴（第2・3表、第6・8図）

第11調査区北側から検出した。遺構の北側は調査区外のため未調査である。第16号溝状遺構に南側の掘り込みが切られている。平面が楕円形を呈する掘り込みを3基、火床部を5ヶ所検出した。図示した遺物は3点で、縄文時代早期後葉である。また、礫が9点、覆土中から出土しており、一部に被熱の痕跡が認められた。

##### ②第16号炉穴（第2・3表、第6・8図）

第11調査区北側から検出した。第20号竪穴住居跡と重複し、第16号溝状遺構に北側の掘り込みが切られている。平面が楕円形を呈する掘り込みを1基、火床部を2ヶ所検出した。図示した遺物は3点で、縄文時代早期後葉である。また、礫が3点、覆土中から出土しており、一部に被熱の痕跡が認められた。

##### ③第17号炉穴（第2・3表、第6・8図）

調査11区中央付近から検出した。掘り込みの平面形は、上部が円形、下部は楕円形を呈する。火床部を1ヶ所検出した。図示した遺物は2点で、縄文時代早期後葉である。また、礫が3点、軽石が1点、覆土中から出土した。礫の一部に被熱の痕跡が認められた。

#### （3）土坑

##### ①第43号土坑（第7図）

調査11区北側から検出した。遺構の北側は調査区外のため未調査である。第16号溝状遺構に南側の掘り込みが切られている。図示できる遺物は出土しなかった。

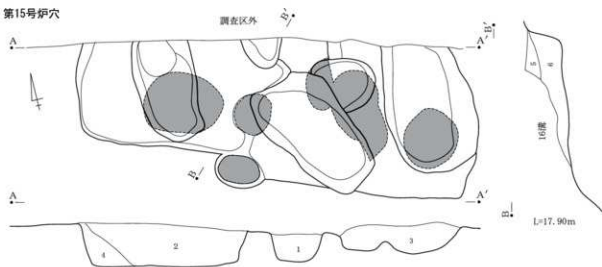
##### ②第44号土坑（第7図）

調査11区北側から検出した。遺構の北側は調査区外のため未調査である。第16号溝状遺構に南側の掘り込みが切られている。図示できる遺物は出土しなかった。

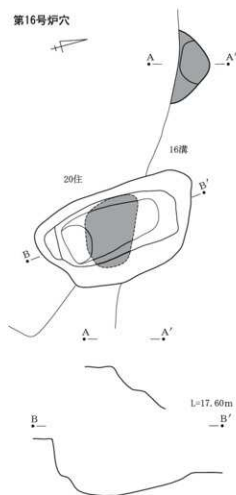
#### （4）遺構外出土縄文土器（第2～5表、第9図）

出土した縄文土器片は合計347点を数え、遺構外出土の中で図示した遺物は23点である。第9図1～12は早期後葉、13・14は前期前葉～中葉、15～17は前期後葉、18は前期末葉～中期初頭、19は加曾利EⅡ～Ⅲ式、20は堀之内1式、21は加曾利B1式、22・23は安行2式である。

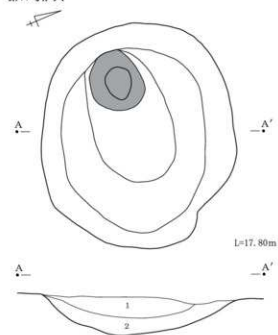
第15号炉穴



第16号炉穴



第17号炉穴



第15号炉穴群

1. 5192/1 黒焼 焼土粒多く含む
2. 5193/2 暗赤焼 焼土粒まばらに含む
3. 5193/3 暗赤焼 焼土粒多く含む
4. 7.5194/4 焼 ローム粒多く含む
5. 7.5193/3 暗焼 焼土粒多く含む
6. 7.5193/4 暗焼 焼土ブロック多く含む

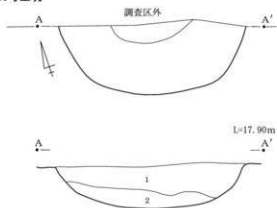
第17号炉穴

1. 7.5192/2 黒焼
2. 7.5193/3 暗焼 焼土粒まばらに含む

第6図 第15・16・17号炉穴

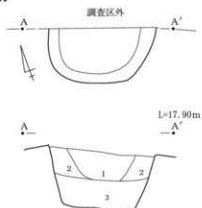


第43号土坑



第43号土坑  
1 7.51X3/2 黒縄  
2 7.51X4/4 縄 ローム粒多く含む

第44号土坑



第44号土坑  
1 7.51X3/3 黒縄  
2 7.51X3/3 縄織 ローム粒まばらに含む  
3 7.51X3/4 縄織 ローム粒多く含む



第7図 第43・44号土坑

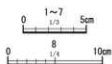
第15号炉穴



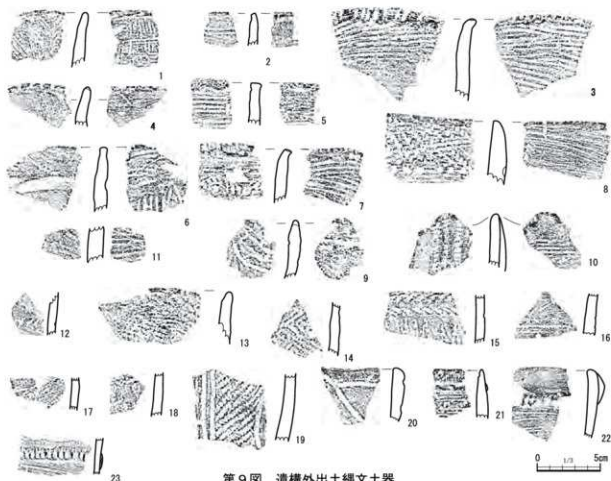
第16号炉穴



第17号炉穴



第8図 炉穴出土縄文土器



第9図 遺構外出土縄文土器

時代・時期	遺構名	位置										穴状				計											
		20	21	22	23	16	17	18	15	14	13	12	45	計													
縄文時代	土器	縄文式土器	72	16	2		16		4	16	14	5		22	163												
		前期縄文	2				3		2					7	10												
		前期縄文	2												2												
		前期縄文	1	1				1							3												
		阿玉式土器	5												5												
		出雲陶器(土器)	5			2	2		1		2				4												
		縄文式土器	9	1	1	2		3	1						3												
		出雲陶器(土器)	1												1												
		安土式土器	1				1								2												
		不明な文				1			1						2												
		縄文のみ	6												6												
		縄文のみ	38	13	1		10		3						60												
		弥生時代	石器	磨石				1								1											
有角石器				1										1													
弥生時代	土器	高杯				1	1							2													
		高口壺												1													
		壺	4	1	5	5		2	1					6													
		甕	3	32	1	17	2	20		4	6			56													
		水注					1							1													
		水注		26										26													
		伊勢瓦				3	2								5												
		弁		32				1							33												
		土師器	5												5												
		土師器	5												5												
古	石器	磨石	91				12							103													
		磨石	1											1													
		磨石	1											1													
中	陶磁器	甕						1					1														
		水筒	1											1													
遺構外	土器	水筒												1													
		磁石												1													
時期不明	磚	磚	328	8	3		32	11		9	3	3	2	40													
		磚	137	264	8	93	5	27	8	31	52	45	11	12	0												
合計			1327	264	8	93	5	27	8	31	52	45	11	12	0	18	9	18	3	16	4	5	2	6	72	145	922

注：磨石、磚、破片

縄文時代重量 11区：2572.5g 20区：5229.5g 21区：258.5g 16溝：4501.9g 17溝：1295.7g 15溝：383.8g 16溝：188.5g 17溝：186.4g 44土：86.6g

20区の弥生時代遺構7区については、弥生時代のものとは断定はできないが、可能性が高いもの。假に弥生時代であれば中期後葉一前期の北関東高の層の範囲。

第2表 出土遺物集計表

## 2 弥生時代（第2・5・6表、第10～15図）

### (1) 概要

検出した遺構は、終末期の竪穴住居跡3軒である。

### (2) 竪穴住居跡

#### ①第21号竪穴住居跡（第2・5表、第10図）

調査11区の東側から検出した。南東隅付近を第17号溝状遺構に切られ、東壁面の一部が攪乱を受けている。主軸方向はN-9°-Wである。平面規模は長軸4.46m×短軸4.42mを測り、平面形態は隅がやや丸い方形を呈する。壁高は0.36m前後を測り、壁は垂直気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、硬化面が認められた。壁溝は南東隅壁付近の一部は消失していたが、全周すると考えられる。柱穴は主柱穴4基を検出した。炉は床面中央からやや西側に設けられ、平面規模は長軸0.62m×短軸0.5m×深さ0.19mを測る。図示した遺物は3点である。1・2は鉢である。覆土中より出土し、同一個体の可能性が高い。3は甕で、炉内から出土した。

#### ②第22号竪穴住居跡（第2・5表、第11・12図）

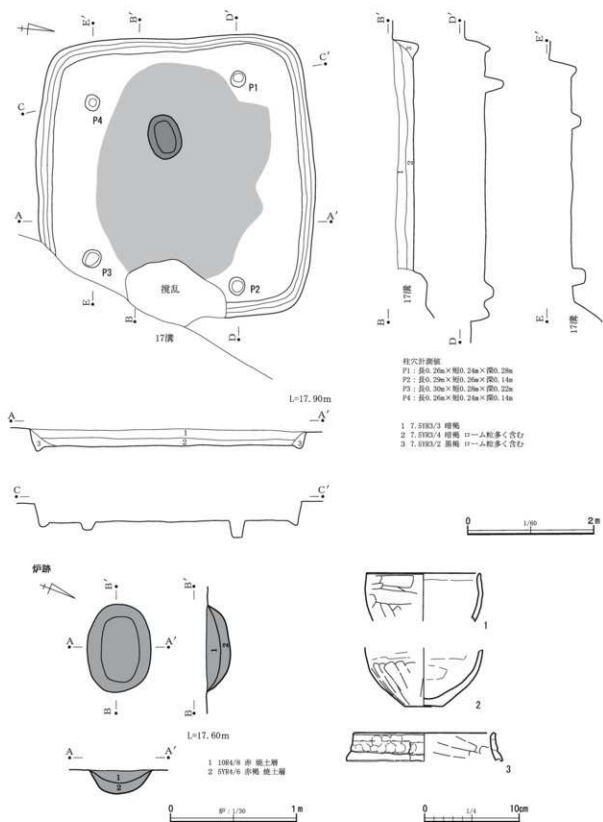
第12調査区の北側から検出した。南東側と西側の壁面と床面中央付近は攪乱を受けている。主軸方向はN-2°-Eである。平面規模は長軸5.2m×短軸4.86mを測り、平面形態は隅がやや丸い方形を呈する。壁高は0.32m前後を測り、壁は垂直気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、壁溝は攪乱を受けているが、全周すると考えられる。柱穴は主柱穴3基、出入口用柱穴1基を検出した。炉は床面中央からやや北側に設けられ、平面規模は長軸0.75m×短軸0.5m×深さ0.14mを測る。また、床面南側付近から炭化物と焼土を検出した。図示した遺物は5点である。1～4は壺である。1～3は床面近くから、4は覆土中から出土した。5は甕で、床面より出土した。

#### ③第23号竪穴住居跡（第2・5・6表、第13～15図）

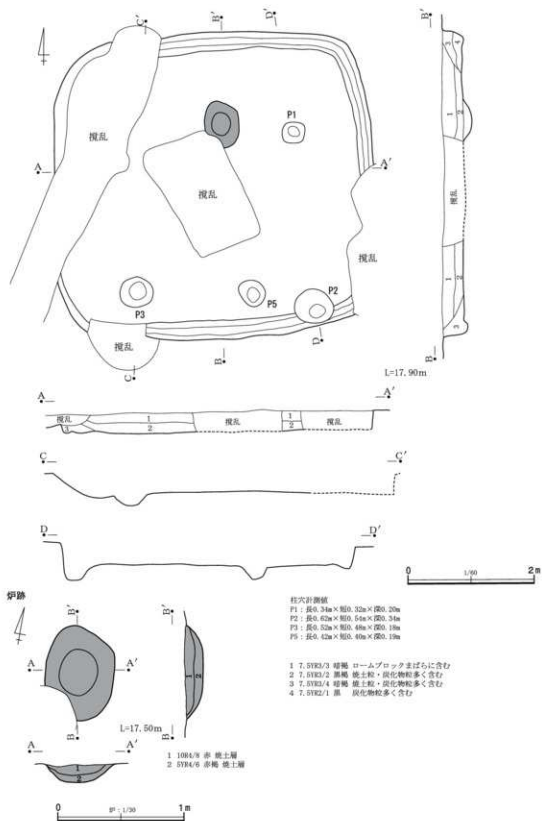
第12調査区の南側から検出した。南東側の壁面を第17号溝状遺構に切られている。主軸方向はN-70°-Eである。平面規模は長軸4.93m×短軸3.61mを測り、平面形態は隅がやや丸い方形を呈する。壁高は0.41m前後を測り、壁は垂直気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦で、硬化面が認められた。壁溝は南東隅付近の一部は消失していたが、全周すると考えられる。柱穴は主柱穴4基、出入口用柱穴1基を検出した。炉は床面中央からやや西側に設けられ、平面規模は、長軸0.84m×短軸0.64m×深さ0.09mを測る。また、床面西側付近と南東側付近から炭化物と焼土を検出した。図示した遺物は12点である。1～3は床面の北東側から、4と5は覆土中から、6～10は炉の西側の床面から、11は覆土下層から、12は北西壁際から出土した。1は高坏、2～4は甕、5は台付甕の脚部、6～10は炉器台である。炉器台は被熱により非常に脆い。11は縄文時代早期の縄釜である。側面に研磨面が認められ、転用されたものと考えられるが、竪穴住居跡に伴うかは不明である。

12は有角石器である。全長12.0cm、刃部最大幅5.8cm、角部最大幅6.25cm、柄部最大幅3.25cm、柄部末端幅3.0cm、厚さ最大2.55cm、重さ233.8gを測り、刃部に欠損があるものの、ほぼ完形である。石材は変質安山岩（註1）である。全体的に研磨されているが、A面とB面及び側面に製作時の擦痕が残っている。また、角部を中心に磨滅の痕跡が認められ、磨滅の部分には光沢感がある。

刃部は角部から直線的に広がる。A面右側とB面の左側に加撃による剥離が、刃先に敲打痕が認め

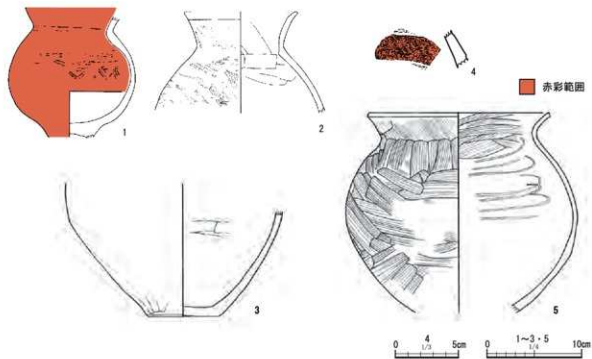
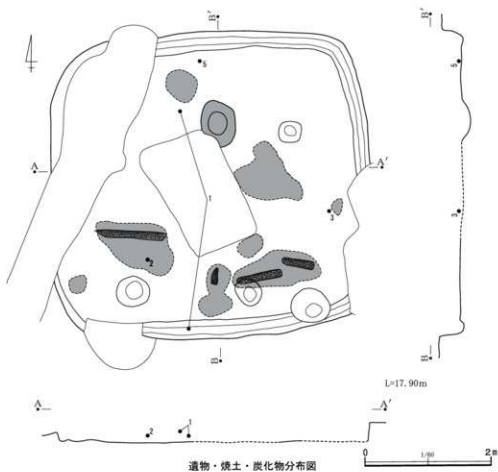


第10図 第21号竪穴住居跡

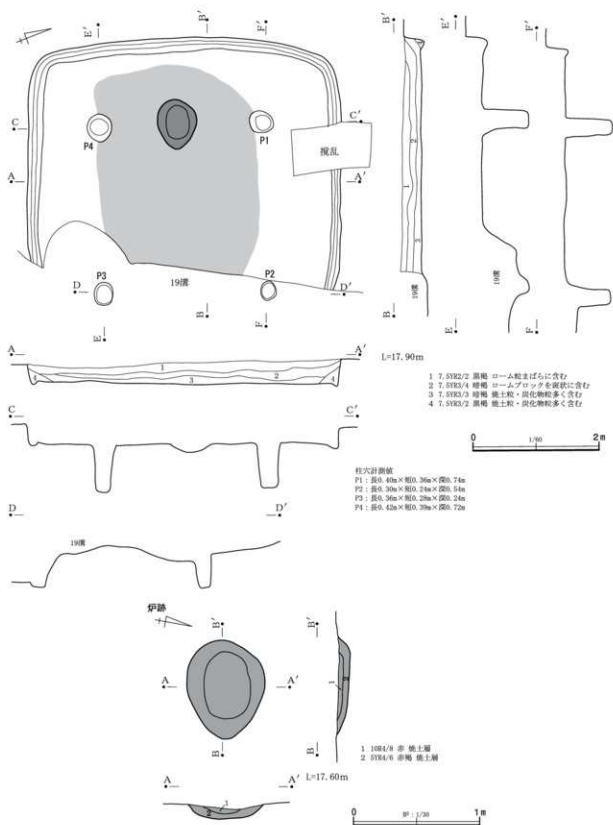


第11図 第22号竪穴住居跡 1

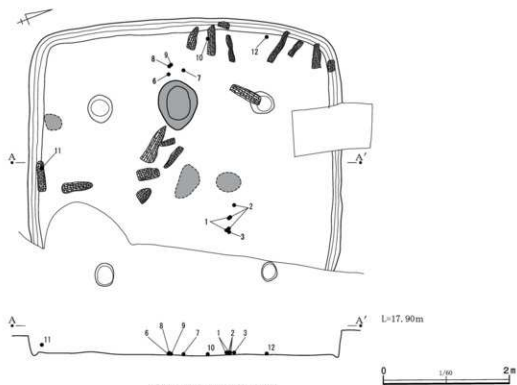




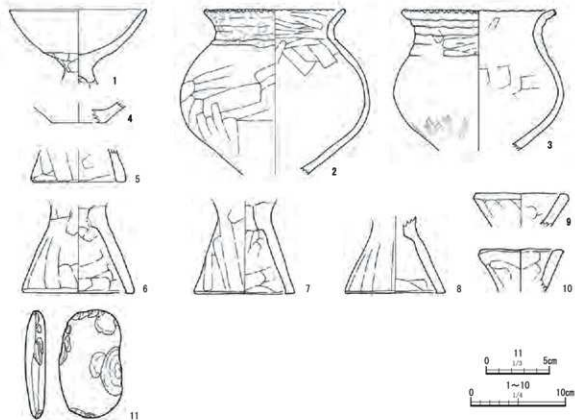
第12図 第22号竪穴住居跡 2



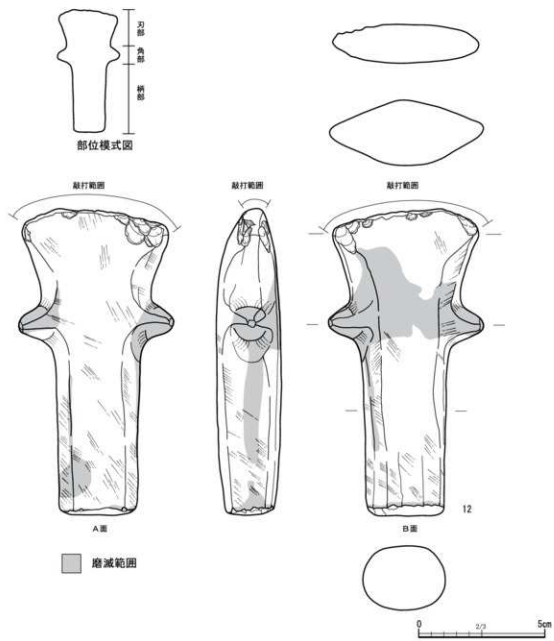
第13図 第23号竪穴住居跡1



遺物・焼土・炭化物分布図



第14図 第23号竪穴住居跡2



刃部刀先写真

第15图 第23号竖穴住居跡3

られる。以上により、刃部の形態はいわゆる撥形を呈しているが、左右非対称である。刃部中央に稜線は認められない。角部は、柄部末端から7.5cm前後の位置にあり、幅は刃部の幅より僅かながら突出している。先端はやや丸みを帯びている。柄部末端は、敲打の痕跡が残り、磨滅が著しい。

(註1) 同じ石材で製作された有角石器が、市原市草刈遺跡F区で6点出土していることを柴田徹氏からご教示いただいた。

柴田徹 2013「第4節 構成岩種から見た草刈遺跡における弥生時代の磨製石斧・千葉県佐倉市大崎台遺跡・神奈川県秦野市砂田台遺跡の磨製石斧との比較から-」『千葉県教育振興財団調査報告第695集 千原台ニュータウンXXX-市原市草刈遺跡(F区)-』(公財)千葉県教育振興財団 文化財センター

### 3 古墳時代(第2・6・8表、第16~18図)

#### (1) 概要

検出した遺構は、中期の竪穴住居跡1軒である。

#### (2) 竪穴住居跡

##### ①第20号竪穴住居跡(第2・6・7表、第16~18図)

第11調査区の西側から検出した。北隅付近で第16号溝状遺構に切れ、北東隅付近で第16号炉穴と重複する。主軸方向はN-56°-Wである。平面規模は長軸5.44m×短軸5.22mを測り、平面形態は方形を呈する。壁高は0.34m前後を測り、壁は垂直気味に立ち上がる。床面はほぼ平坦である。壁溝は北隅付近の一部は消失していたが、全周すると考えられる。また、主柱穴と繋がる間仕切り溝4条を検出した。柱穴は主柱穴4基、出入り口用柱穴1基を検出した。炉は床面中央からやや北西側に設けられ、平面規模は、長軸0.54m×短軸0.48m×深さ0.12mを測る。貯蔵穴は南西隅付近から検出した。平面規模は、長軸0.54m×短軸0.48m×深さ0.12mを測る。また、床面ほぼ全面から焼土を検出した。図示した遺物は20点である。1・9・13・17・18は南東側、6・8・20は貯蔵穴周辺、11・15は西隅周辺、12・19は炉の周辺から、その他は覆土中から出土した。1~5は坏、6は高坏、7は直口壺、8~10は鉢、11は壺、12~14は甕である。15は磨石類、16・17は砥石、18は磨石類、19は敲石、20は軽石製品である。石器・石製品類は、竪穴住居跡に伴うかは不明である。

### 4 中・近世(第2・8表、第19~21図)

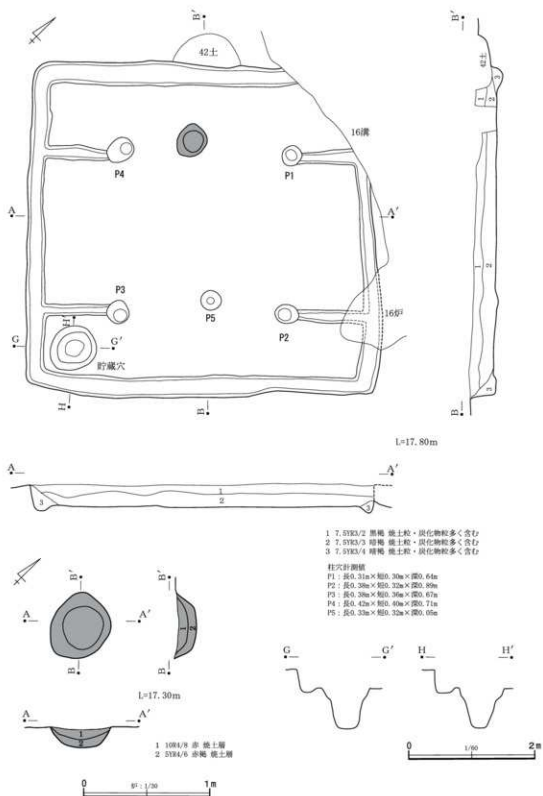
#### (1) 概要

検出した遺構は、溝状遺構3条と土坑3基である。第16号溝状遺構は、検出状況から市立都小学校の敷地内まで延びると考えられる。第17・19号溝状遺構は、同一の遺構の可能性が高いが、検出した調査区ごとに遺構番号を付けて調査を実施し、本報告もこれを踏襲した。また、両溝状遺構は、平成21・22年度調査で検出した第3号溝状遺構に繋がると考えられる。

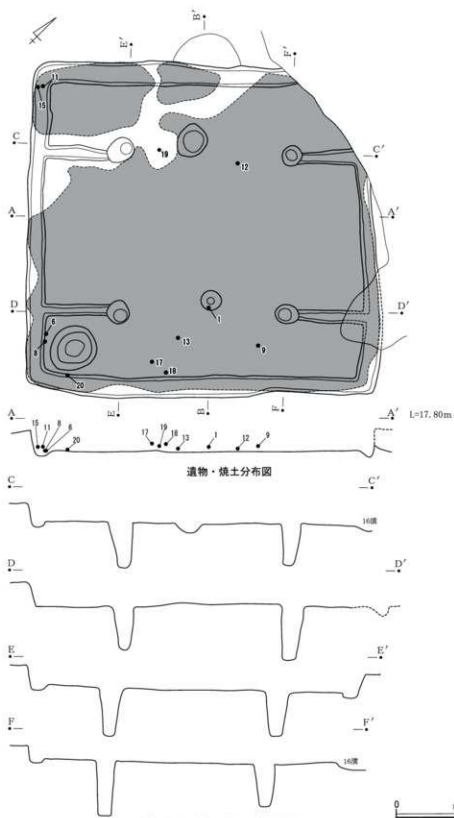
#### (2) 溝状遺構

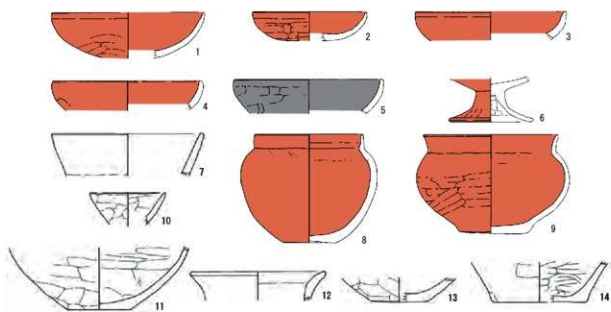
##### ①第16号溝状遺構(第2表、第19図)

第11調査区の北側から検出し、調査区の北端に沿って東西方向に走る。第15・16号炉穴、第20号竪穴住居跡を切り、調査区中央付近で第45号土坑に切られる。第17号溝状遺構とは調査区東端側で重複

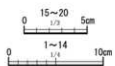
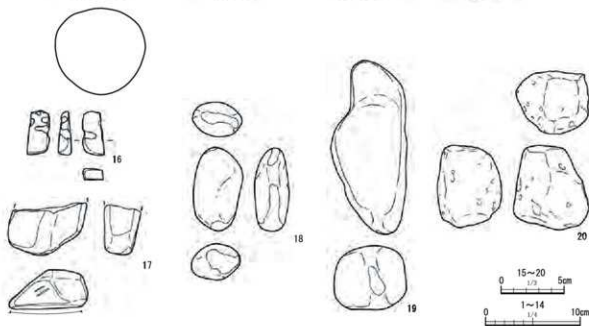
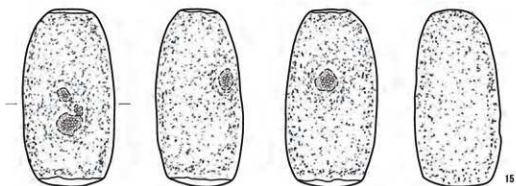


第16図 第20号竪穴住居跡 1





■ 赤彩範圍 ■ 黑彩範圍



第18圖 第20号竖穴住居跡 3



するが、覆土堆積状況から本遺構の方が古いと判断した。検出全長23.0m、上面幅2.5m前後、底面0.5m前後、深さ最大1.5mを測る。断面は、底面から大きく開き、緩やかなV字状を呈している。東端側に土坑状の掘り込みが認められ、これを起点に、本遺構は西方向へ延びている。断面の形状と深さから、本遺構は堀跡として造られたと考えられる。また、覆土第2層で硬化面が認められたことから、後に堀底道として利用されていたことも考えられる。遺物は、覆土中から縄文土器と弥生土器、土師器、被熱した礫が出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ②第17号溝状遺構（第2・8表、第19図）

第11調査区の東側から検出し、調査区の東端に沿って南北方向に走る。第21号竪穴住居跡と第16号溝状遺構を切る。検出全長8.5m、上面幅4.2m前後、底面1.0m前後、深さ最大1.0mを測る。断面は、底面から0.2m前後まで垂直気味に立ち上がった後に、大きく開く形状を呈している。断面の形状と深さから、本遺構も第16号溝状遺構と同様に堀跡として作られたと考えられる。また、覆土第13層で宝永火山灰が認められたことから、本遺構は宝永年間には埋没していたことが考えられる。遺物は、覆土中から常滑の甕が1点出土した。その他、縄文土器と弥生土器、土師器、被熱した礫も出土したが、細片のため図示できなかった。

#### ③第18号溝状遺構（第19図）

第11調査区から検出した。第20・21号竪穴住居跡と重複するが、本遺構が新しい。検出全長10.0m、幅0.6m前後、深さ0.2mを測る。遺物は出土しなかった。覆土から近世以降の溝跡と考えられる。

#### ④第19号溝状遺構（第2表、第20図）

第12調査区の東側から検出し、調査区の東端に沿って南北方向に走る。第23号竪穴住居跡の東壁を切る。検出全長10.3m、上面幅4.9m前後、底面1.1m前後、深さ最大1.1mを測る。断面は、大きく開く形状を呈している。底面から長軸3.5m前後×1.0m前後を測る土坑を2基検出した。両土坑は6m前後の間隔で配置されており、調査区外でも同様に配置されていることが予想される。断面の形状と深さから、本遺構も堀として作られたと考えられる。また、覆土第2層で硬化面が認められたことから、後に第16号溝状遺構と同様に堀底道として利用されていたことも考えられる。遺物は、覆土中から縄文土器と弥生土器、土師器が出土したが、細片のため図示できなかった。

### (3) 土坑

#### ①第42号土坑（第21図）

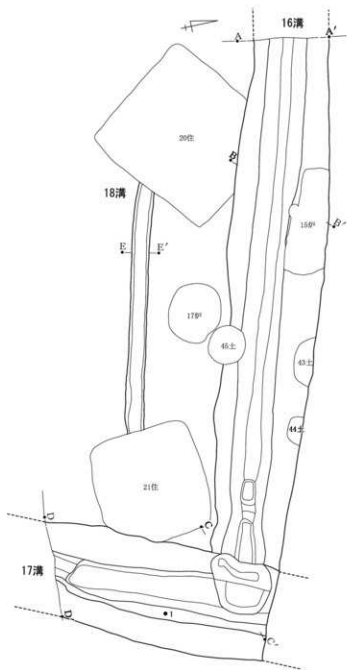
第11調査区の北西側から検出し、第20号竪穴住居跡の北西壁を切る。検出長軸1.1m×短軸0.52m、深さ最大0.24mを測る。遺物は出土しなかった。時期は覆土から近世以降と考えられる。

#### ②第45号土坑（第21図）

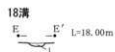
第11調査区の中央付近から検出し、第16号溝状遺構を切る。長軸1.6m×短軸1.56m、深さ最大0.7mを測る。遺物は出土しなかった。時期は覆土から近世以降と考えられる。

#### ③第46号土坑（第21図）

第12調査区の中央付近から検出した。長軸1.04m×短軸1.0m、深さ最大0.3mを測る。遺物は出土しなかった。時期は覆土から近世以降と考えられる。遺物は、覆土中から土師器と被熱した礫が出土したが、細片のため図示できなかった。



第17号溝状遺構出土遺物



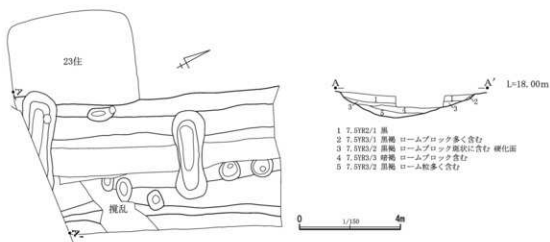
第16・17号溝状遺構  
1~11層：第16号溝状遺構、12~15層：第17号溝状遺構

- 1 7.5YR3/3 埴輪 ロームブロック形状を含む 横化面
- 2 7.5YR3/3 埴輪 ロームブロック形状を含む 横化面
- 3 7.5YR3/3 埴輪 ロームブロック含む
- 4 7.5YR3/2 埴輪 ロームブロック含む
- 5 7.5YR3/3 埴輪 ロームブロック含む
- 6 7.5YR4/4 埴輪 ロームブロック多く含む
- 7 7.5YR3/3 埴輪 ロームブロック形状を含む
- 8 7.5YR2/2 黒 ロームブロック含む
- 9 7.5YR3/4 埴輪 ローム粒多く含む
- 10 7.5YR3/2 埴輪
- 11 7.5YR2/2 黒輪
- 12 7.5YR3/2 埴輪 ローム粒含む
- 13 7.5YR2/1 黒 黒色砂質土 宝永火山灰層
- 14 7.5YR3/3 埴輪 ローム粒含む
- 15 7.5YR3/2 黒輪

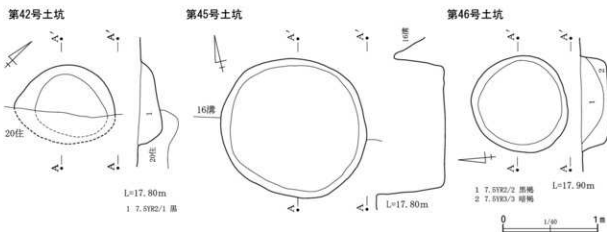
第18号溝状遺構  
1 7.5YR3/2 黒輪



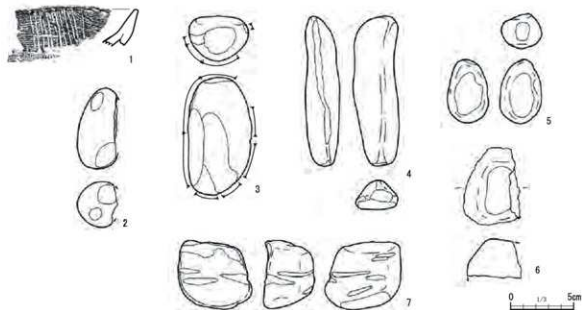
第19図 第16・17・18号溝状遺構



第20図 第19号溝状遺構



第21図 第42・45・46号土坑



第22図 遺構外出土遺物

遺構 番号	図版 番号	種類 器種	法量		技法・その他	色調等	
15号	第8号 1	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面貝殻条痕文。外面 貝殻条痕文を施した後、口唇部及 び上半に貝殻復縁文を施す。下部 に刺突意匠文。剥落著しいが、波 状口縁と考えられる。胎土に繊維 含む。早期後葉。	色調	黒褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(7.1)		焼成	良好
	第8号 2	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内外面擦痕。口唇部に 刻み。外面に刺突意匠文。胎土に 繊維含む。早期後葉。	色調	灰黄褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(3.3)		焼成	良好
	第8号 3	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内面擦痕。外面貝殻条痕 文。胎土に繊維含む。早期後葉。	色調	暗褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(6.6)		焼成	良好
16号	第8号 4	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面貝殻条痕文。外面 原体無節(L)を施す。胎土に繊維 含む。早期後葉。	色調	黒褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(4.2)		焼成	良好
	第8号 5	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内外面貝殻条痕文。胎土 に繊維含む。早期後葉。	色調	褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(4.5)		焼成	良好
第8号 6	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内面擦痕、外面貝殻条痕 文。胎土に繊維含む。早期後葉。	色調	にぶい褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(4.6)		焼成	良好	
17号	第8号 7	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内外面貝殻条痕文。胎土 に繊維含む。早期後葉。	色調	灰褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(5.8)		焼成	良好
第8号 8	縄文土器 深鉢	口径	-	底部1/3残存。内面貝殻条痕文の後 ナデ。外面擦痕。底部条痕文。胎 土に繊維含む。早期後葉。	色調	褐	
		底径	(7.0)		胎土	白色粒・石英	
		器高	(3.1)		焼成	良好	
遺構 外	第9号 1	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内外面貝殻条痕文。胎土 に繊維含む。早期後葉。20住覆土。	色調	にぶい黄橙
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(4.4)		焼成	良好
	第9号 2	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面ナデ。外面条線で文 様を施す。早期後葉?。20住覆土。	色調	明赤褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(2.7)		焼成	良好
	第9号 3	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内外面貝殻条痕文。口唇部 に貝殻復縁文。胎土に繊維含む。早期 後葉。20住覆土。	色調	にぶい黄橙
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(6.5)		焼成	良好
	第9号 4	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面貝殻条痕文。外面擦痕。 口唇部に竹管による刻み。胎土に繊維 含む。早期後葉。20住覆土。	色調	明赤褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(3.0)		焼成	良好
	第9号 5	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面貝殻条痕文施文後、上部は 早節縄文を施文。外面条痕文。口唇部に早 節縄文及び拂糸文が施される。胎土に繊維 含む。早期後葉。17住覆土。	色調	灰黄褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(3.2)		焼成	良好
	第9号 6	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面貝殻条痕文。外面は擦 痕の後、1条の凹線が施される。胎土 に繊維含む。早期後葉。20住覆土。	色調	褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(5.1)		焼成	良好

第3表 出土遺物観察表 1

単位はcm、g。○は残存・推定値

遺構 番号	図版 番号	種類 器種	法量		技法・その他	色調等	
			口径	-		色調	
遺 構 外	第9図 7	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内外面貝殻条痕文。外面は棒状工具による刺突意匠文が施される。口唇部に刻み。胎土に繊維含む。早期後葉。22住覆土。	色調	灰褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(4.2)		焼成	良好
	第9図 8	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内外面貝殻条痕文。外面は貝殻条痕文及び棒状工具による押し文で横位区画が施される。口唇部にも貝殻条痕文。胎土に繊維含む。早期後葉。16溝覆土。	色調	灰褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(5.2)		焼成	良好
	第9図 9	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内外面ナデ。外面は原形不明の縄文が施される。口唇部に刻み。胎土に繊維含む。早期後葉。20住覆土。	色調	にぶい褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(4.6)		焼成	良好
	第9図 10	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面条痕文。外面は隆帯に沿って刻みが施される。波状口縁。胎土に繊維含む。早期後葉。16溝覆土。	色調	にぶい褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(4.6)		焼成	良好
	第9図 11	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内面貝殻条痕文。外面はナデの後、貝殻背圧痕文が施される。胎土に繊維含む。早期後葉。16溝覆土。	色調	灰褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(2.9)		焼成	良好
	第9図 12	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内外面条痕文。外面は櫛歯状工具による斜位の刻み。胎土に繊維含む。早期後葉。11区。	色調	灰黄褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(3.4)		焼成	良好
	第9図 13	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面ヘラケズリ。外面は擔糸文(R)を施す。胎土に繊維含む。前期前葉～中葉。20住覆土。	色調	にぶい黄褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
器高			(4.2)	焼成		良好	
第9図 14	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内面ナデ。外面は環状末端0段多条半節RL・LRの羽状縄文が施される。胎土に繊維含む。前期前葉～中葉。20住覆土。	色調	にぶい黄橙	
		底径	-		胎土	石英微量	
		器高	(4.4)		焼成	良好	
第9図 15	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内面ナデ。外面は幅広の変形爪形文が施され、下部は波状貝殻文が施される。前期後葉。11区。	色調	にぶい黄褐	
		底径	-		胎土	礫・石英	
		器高	(3.9)		焼成	良好	
第9図 16	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内面ナデ。外面は櫛歯状工具により波状文と横位区画が施される。前期後葉。11区。	色調	褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(3.6)		焼成	良好	
第9図 17	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内面ナデ。外面は波状貝殻文が施される。前期後葉。17溝覆土。	色調	にぶい黄橙	
		底径	-		胎土	海綿骨針微量	
		器高	(2.7)		焼成	良好	
第9図 18	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内面ナデ。外面は横位の結節回転文が施される。前期末葉～中初期頃。11区。	色調	にぶい褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(3.5)		焼成	良好	
第9図 19	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内面ナデ。外面は磨消縄文(原形半節RL)。加曾利EⅡ～Ⅲ式。20住覆土。	色調	にぶい褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(5.4)		焼成	良好	
第9図 20	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面ナデ。外面は棒状工具による沈線で文様を描出する。堀之内1式。21住覆土。	色調	にぶい褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(4.5)		焼成	良好	
第9図 21	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面ミガキ。外面は地文にLR縄文を施した後、隆帯を貼り付け隆帯上に押捺を施す。口唇内面沈線。加曾利B1式。22住覆土。	色調	にぶい褐	
		底径	-		胎土	白色粒・石英	
		器高	(3.9)		焼成	良好	

第4表 出土遺物観察表2

単位はcm、g、○は残存・推定値

遺構番号	図版番号	種類器種	法量		技法・その他	色調等		
遺構外	第9図 22	縄文土器 深鉢	口径	-	口縁部片。内面ナデ。肥厚する口縁部 下端に紐線文を施す。外面下部は沈線 が施される。安行2式。16溝覆土。	色調	灰褐	
			底径	-		胎土	白色粒・石英	
			器高	(5.5)		焼成	良好	
	第9図 23	縄文土器 深鉢	口径	-	胴部片。内面ナデ。外面は紐線文 を施し、下部は沈線が施される。 安行2式。20住覆土。	色調	灰褐	
			底径	-		胎土	白色粒・石英	
			器高	(2.9)		焼成	良好	
21住	第10図 1	弥生土器 鉢	口径	(11.8)	口縁部片。内面ヘラナデ及びナデ。口縁 部内面ヘラ状工具による綾線。外面ヘラ ケズリ、一部ヘラケズリ後ナデ。2と同一 個体。	色調	にぶい褐	
			底径	-		胎土	白色粒・石英	
			器高	(5.1)		焼成	良好	
	第10図 2	弥生土器 鉢	口径	-	体部～底部2/3残存。内面ヘラナデ 及びナデ。外面ヘラケズリ後ナデ。 底部ナデ。1と同一個体。	色調	にぶい褐	
			底径	4.0		胎土	白色粒・石英	
			器高	(6.2)		焼成	良好	
	第10図 3	弥生土器 甕	口径	(14.6)	口縁部片。内面ヘラナデ。外面輪積み 痕を残す。一部ナデ消え、指頭痕が残る。 口唇部は端面を形成する。	色調	褐	
			底径	-		胎土	白色粒・石英	
			器高	(3.0)		焼成	良好	
22住	第12図 1	弥生土器 壺	口径	-	ほぼ完形。内面ナデ。口縁部内面 ヘラミガキ、外面ナデ及びヘラミ ガキ。外面横方向の直線文及び鋸 歯文が施文されるが、施文後に縦 位のヘラミガキにより大部分が消 えている。本来文様は全周してい たものと考えられる。底部ナデ。 頸部内面及び外面赤彩。内面は全 体的に摩耗し、口縁部及び底部も 摩耗している。底部は輪台状とな る。中台2式。	色調	にぶい赤褐	
			底径	-		胎土	白色粒・石英	
			器高	(13.7)		焼成	良好	
			口径	(11.7)		口縁部～体部上半2/3残存。内面ヘ ラナデ及びナデ。口縁部内面ヘラ ケズリ後ナデ及びヘラミガキ。口 唇部内面ミガキ、外面ヨコナデ。 口縁部外面ヘラミガキ。外面ヘラ ケズリ後ヘラミガキ。中台2式。	色調	褐
			底径	-			胎土	白色粒・石英
			器高	(10.7)			焼成	良好
	第12図 2	弥生土器 壺	口径	-	胴部下半～底部残存。内面ナデ及 びヘラナデ。外面ヘラケズリ後ナ デ及びミガキ。下端及び底部ヘラ ケズリ後ナデ。全体的に歪んでい る。破断面及び底部が摩耗し、二 次的に転用された可能性もある。	色調	にぶい褐	
			底径	7.2		胎土	白色粒・石英	
			器高	(14.4)		焼成	良好	
	第12図 4	弥生土器 壺	口径	-	体部片。内面ナデ。外面網目状 縵糸文を沈線で区画。無文部はヘラ ミガキ。外面無文部赤彩。	色調	赤褐	
			底径	-		胎土	白色粒少量	
			器高	(3.2)		焼成	良好	
	第12図 5	弥生土器 甕	口径	19.0	4/5残存。内面ナデ及びヘラミガ キ。口縁部内面～外面ハケ。外面 下半に炭化物が付着。中台2式。	色調	灰褐	
			底径	-		胎土	白色粒・石英	
			器高	(21.0)		焼成	良好	
	23住	第14図 1	弥生土器 高坏	口径	14.2	坏部残存。内面ミガキ。坏部外面ヘラケ ズリ後丁寧なナデ。脚部ヘラケズリ後ナ デ。脚部内面ヘラナデ。3方透かしと考 えられる。中台2式。	色調	褐
				底径	-		胎土	白色粒・石英
				器高	(7.8)		焼成	良好

第5表 出土遺物観察表3

単位はcm、g、○は残存・推定値

遺構 番号	図版 番号	種類 器種	法量		技法・その他	色調等	
			口径	底径		胎土	焼成
23住	第14図 2	弥生土器 甕	口径	14.6	2/3残存。内面ナデ。口縁部内面へ ラナデ。口唇部刻み、口縁部外面 輪積み痕が残る。上部は輪積み痕 が消えかけ、指頭痕が残る。外面 上部へラナデ及びびナデ、下部はへ ラケズリ後ミガキ。4と同一個体 か。中台2式。	色調	にぶい黄褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(17.6)		焼成	良好
	第14図 3	弥生土器 甕	口径	(15.8)	1/2残存。内面へラナデ及びびナデ、 部分的にミガキ。口唇部刻み、口 縁部外面輪積み痕が残る。輪積み 痕は部分的にナデ消え、指頭痕が 残る。外面上部ナデ、下部はへラ ミガキ。胴部中位に炭化物が付 着。中台2式。	色調	にぶい黄褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(15.0)		焼成	良好
	第14図 4	弥生土器 甕	口径	-	底部片。内外面ミガキ。底部へラ ケズリ後ナデ。	色調	褐
			底径	(5.6)		胎土	白色粒・石英
			器高	(2.2)		焼成	良好
	第14図 5	弥生土器 台付甕	口径	-	底部片。内面ナデ。外面へラナデ。	色調	黒褐
			底径	(9.6)		胎土	赤褐色粒・石英
			器高	(2.2)		焼成	良好
	第14図 6	弥生土器 炉器台	口径	-	脚部残存。内外面へラナデ及びび ナデ。一部剥落している。被熱に より非常に脆い。	色調	灰黄褐
			底径	11.4		胎土	赤褐色粒・石英
			器高	(9.2)		焼成	不良
第14図 7	弥生土器 炉器台	口径	-	脚部残存。内外面へラナデ及びび ナデ。中空部へラナデ。一部剥落し ている。被熱により非常に脆い。	色調	灰黄褐	
		底径	10.4		胎土	赤褐色粒・石英	
		器高	(9.7)		焼成	不良	
第14図 8	弥生土器 炉器台	口径	-	脚部残存。内外面へラナデ及びび ナデ。一部剥落している。被熱に より非常に脆い。	色調	灰黄褐	
		底径	10.4		胎土	赤褐色粒・石英	
		器高	(8.1)		焼成	不良	
第14図 9	弥生土器 炉器台	口径	(9.4)	受け部1/4残存。内外面へラナデ及 びびナデ。一部剥落している。被熱 により非常に脆い。	色調	灰黄褐	
		底径	-		胎土	赤褐色粒・石英	
		器高	(3.5)		焼成	不良	
第14図 10	弥生土器 炉器台	口径	8.5	受け部残存。内外面へラナデ及び びナデ。一部剥落している。被熱に より非常に脆い。	色調	にぶい黄橙	
		底径	-		胎土	礫	
		器高	(4.4)		焼成	良好	
第14図 11	石器 鎌斧	完形。全長：8.4、最大幅：4.9、厚さ最大：1.6、重量：100.3、石材：ホル ンフェルス、側面に研磨面が残る、鎌斧として使用された後に、転用された ものと考えられる。					
第15図 12	石器 有角石器	完形。全長：12.0、刃部最大幅：5.80、角部最大幅：6.25、柄部最大幅：3.25、柄部末 端幅：3.0、厚さ最大：2.55、重量：233.8、石材：変質安山岩。刃部には剥離と敲打痕 が残る、部分的に磨滅している。表裏及び側面に製作時の磨痕が残る。					
20住	第18図 1	土師器 坏	口径	(16.0)	1/3残存。内面ナデ。口縁部外面 ヨコナデ、外面へラケズリ後ナデ。 内外面赤彩。	色調	赤褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(4.8)		焼成	良好
	第18図 2	土師器 坏	口径	12.0	口縁部片。内面ナデ。口縁部外面 ヨコナデ、外面へラケズリ後ナデ。 内外面赤彩。	色調	赤褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(3.0)		焼成	良好

第6表 出土遺物観察表4

単位はcm、g、○は残存・推定値

遺構 番号	図版 番号	種類 器種	法量		技法・その他	色調等	
20住	第18図 3	土師器 坏	口径	(16.0)	口縁部片。内面ナデ。口縁部外面 ヨコナデ、外面ヘラケズリ後ナデ。 焼成 良好	色調	赤褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(3.0)		焼成	良好
	第18図 4	土師器 坏	口径	(15.6)	口縁部片。内面ナデ。外面ヘラケ ズリ後ナデ。内外面赤彩。	色調	赤褐
			底径	-		胎土	白色粒・石英
			器高	(3.1)		焼成	良好
	第18図 5	土師器 坏	口径	(15.6)	口縁部片。内面ナデ。外面ヘラケ ズリ後ナデ及びミガキ。外面及び 内面上半黒彩。	色調	褐灰
			底径	-		胎土	石英・白色粒
			器高	(3.6)		焼成	良好
	第18図 6	土師器 高坏	口径	-	1/3残存。坏部内面ヘラケズリ後ミ ガキ。坏部外面及び脚部外面ヘラ ケズリ後ナデ。脚部内面ヘラケズ リ、裾部内面ナデ。坏部内外面及 び脚部外面赤彩。	色調	赤褐
			底径	(9.0)		胎土	白色粒・石英
			器高	(4.8)		焼成	良好
	第18図 7	土師器 直口壺	口径	(15.8)	口縁部片。内外面共にナデ。	色調	浅黄橙
			底径	-		胎土	白色粒・礫
器高			(4.7)	焼成		良好	
第18図 8	土師器 鉢	口径	11.4	完形。内面ヘラケズリ後ナデ。口 縁部内外面ヨコナデ。外面及び底 部ヘラケズリ後ナデ。外面に一部 ハケが残る。内外面赤彩。	色調	赤褐	
		底径	5.5		胎土	白色粒・石英	
		器高	11.4		焼成	良好	
第18図 9	土師器 鉢	口径	14.2	ほぼ完形。内面ヘラケズリ後ナデ。 口縁部内外面ヨコナデ。外面及び 底部ヘラケズリ後ナデ。頸部内面 に指頭痕、内面及び頸部外面に輪 積み痕が残る。内外面赤彩。	色調	灰黄	
		底径	7.6		胎土	白色粒	
		器高	10.3		焼成	良好	
第18図 10	土師器 鉢	口径	(8.0)	口縁部片。内外面共にヘラケズリ 後ナデ。	色調	にぶい黄橙	
		底径	-		胎土	石英・白色粒	
		器高	(3.3)		焼成	良好	
第18図 11	土師器 壺	口径	-	底部2/3残存。内面ヘラナデ及びナ デ。外面及び底部ヘラケズリ後ナ デ。	色調	にぶい褐	
		底径	6.8		胎土	石英・白色粒	
		器高	(6.6)		焼成	良好	
第18図 12	土師器 甕	口径	(14.2)	口縁部片。内面下半ヘラナデ。口 縁部内外面共にヨコナデ。	色調	黒褐	
		底径	-		胎土	石英・白色粒	
		器高	(3.2)		焼成	良好	
第18図 13	土師器 甕	口径	-	底部片。内面ヘラケズリ。外面及 び底部ヘラケズリ後ナデ。	色調	にぶい赤褐	
		底径	(9.8)		胎土	石英・白色粒	
		器高	(4.3)		焼成	良好	
第18図 14	土師器 甕	口径	-	底部片。内面ヘラナデ及びナデ。 外面ヘラケズリ。底部ヘラケズリ 後ナデ。	色調	褐	
		底径	(6.0)		胎土	石英・白色粒	
		器高	(2.6)		焼成	良好	

第7表 出土遺物観察表5

単位はcm、g、()は残存・推定値



遺構 番号	図版 番号	種類 器種	法量		技法・その他	色調等	
20住	第18図 15	石器 磨石類	完形。全長：15.5、最大幅：7.6、厚さ最大：7.6、重量：1212.7、石材：安山岩。上下端に幅広い研磨面、側面に敲打痕が残る。				
	第18図 16	石器 砥石	完形。全長：3.5、最大幅：1.8、厚さ最大：1.1、重量：8.6。表裏及び側面に溝状の使用痕が残る。				
	第18図 17	石器 砥石	欠損あり。全長：6.2、残存幅：4.1、厚さ最大：3.0、重量：94.2。ほぼ全周に研磨面が認められる。				
	第18図 18	石器 磨石類	完形。全長：6.6、最大幅：3.9、厚さ最大：2.7、重量：95.3。楕円形礫の上端に狭い研磨、側面から下端にかけて幅広い研磨が認められる。				
	第18図 19	石器 敲石	完形。全長：13.6、最大幅：6.0、厚さ最大：5.1、重量：519.4。不整形礫の下端に狭い敲打痕が残る。				
	第18図 20	石器 軽石製品	完形。全長：6.5、最大幅：5.9、厚さ最大：5.0、重量：62.4。上端に研磨された面が残る。				
17溝	第19図 1	常滑 甕	口径	-	銅部片。内面ハケ状工具によるナデ。外面ヘラ状工具によるナデ及びナデ。外面に指頭痕が残る。	色調	暗赤褐
			底径	-		胎土	石英・白色粒
			器高	(10.7)		焼成	良好
遺構 外	第21図 1	弥生土器 壺	口径	-	口縁部片。内面ヘラケズリ後ナデ。外面ハケの後縦位の沈線を12条施す。内面赤彩。複合口縁。弥生時代終末。17溝覆土。	色調	にぶい黄褐
			底径	-		胎土	石英・白色粒
			器高	(2.9)		焼成	良好
	第21図 2	石器 磨石類	欠損あり。全長：6.3、残存幅：3.1、厚さ最大：3.6、重量：103.5。楕円形礫の上端に敲打痕、下半に幅の広い研磨、下端に狭い敲打痕が残る。11区。				
	第21図 3	石器 磨石類	欠損あり。全長：9.1、最大幅：5.1、厚さ最大：3.6、重量：257.6。楕円形礫の上下端及び側面に研磨面、または敲打痕が認められる。23住覆土。				
	第21図 4	石器 磨石類	完形。全長：11.9、最大幅：3.6、厚さ最大：2.3、重量：150.1。不整形礫の上下端及び左側面に研磨面、または敲打痕が認められる。22住覆土。				
	第21図 5	石器 磨石類	完形。全長：4.9、最大幅：3.2、厚さ最大：2.7、重量：70.0。楕円形礫の上端に研磨面が認められる。16溝覆土。				
	第21図 6	石器 磨石	欠損あり。残存長：6.0、残存幅：4.4、残存厚さ：3.1、重量：128.9。上面に鏡面状の研磨面が認められる。17溝覆土。				
第21図 7	石器 砥石	完形。全長：5.4、最大幅：5.8、厚さ最大：3.9、重量：171.8。表裏及び側面に溝状の使用痕が残る。16溝覆土。					

第8表 出土遺物観察表6

単位はcm、g。○は残存・推定値

## 5 遺構外出土遺物（縄文土器以外、第2・8表、第22図）

### (1) 概要

調査区内から出土した。図示できた遺物は7点である。1は弥生土器壺の口縁部、2～6は磨石類、7は砥石である。

## 第3章 まとめ

### 1 縄文時代

炉穴は、本遺跡の所在する台地の北側に広く分布していたと考えられる。本遺跡は、縄文時代早期の地点貝塚として著名であるが、今回の調査では、貝層を伴う遺構は検出しなかった。

### 2 弥生時代～古墳時代

平成21・22年度調査結果を合わせると、弥生時代後期から終末期と古墳時代中期の集落跡が、台地中央から北側にかけて展開することが明らかとなった。本遺跡が立地する都川下流域には、同一台地上に弥生時代中期から古墳時代前期の墓域である辺田遺跡が、対岸の台地上には弥生時代中期から古墳時代前期の集落跡である星久喜遺跡、弥生時代中期から古墳時代中期の集落跡である城之腰遺跡が点在しており、各遺跡間との相互比較検討が課題となる。

### 3 有角石器

弥生時代終末期の第23号竪穴住居跡の北西壁際から、有角石器が出土した。有角石器は、弥生時代中期後半から後期に位置付けられている磨製石器で、全国では95例、県内では27例が報告されている(註1)。市内では、加曾利貝塚の西側周辺から出土した例(註2)があるのみで、本報告の資料が2例目となるであろう(註3)。

本資料では、刃部中央に稜線は認められなかったが、刃先に剥離と敲打痕が認められた。この痕跡は、他の資料でも同様のものが確認されていることから(註4)、用途は不明であるが使用時に生じたものと考えられる。

全国的な資料傾向から、有角石器の製作時期が弥生時代終末期まで降る可能性は低いので、本例は、周辺の遺跡、または本遺跡の未調査地点から持ち込まれたことが推測される。有角石器の製作時期の下限については、資料の増加を待ちたい。

### 4 中・近世

検出した溝状遺構は堀跡と考えられ、平成21・22年度で検出した台地整形区画と関連するものと考えられる。時期を限定しうる遺物は出土しなかったが、先年度調査の結果から、概ね15世紀後半から16世紀代に相当すると考えられる。また、覆土中から硬化面と宝永火山灰が認められたことから、後に堀底道として利用され、宝永年間は埋没していたことが考えられる。

(註1) 関 俊彦 1986 『九 有角石器の所属時期と用途』『論争・学説 日本の考古学 第4巻 弥生時代』雄山閣出版株式会社

岡本孝之 1999 『足洗型石器の研究』『考古学雑誌』第84巻第3号 日本考古学会

鎌原孝之 1996 『千葉県旭市足洗出土の有角石器について』『研究連絡誌』第46号 千葉県文化財センター

(註2) 中谷浩字二郎 1924 『東大人類学会報より発見されし二個の石器に就て』『人類学雑誌』第39巻第7・8・9号合併号 東京人類学会

(註3) ただし、個人が所蔵している未報告の資料が存在する可能性もあるので、資料数については注意が必要である。

(註4) (財) 千葉県文化財センター 1994 『千葉県文化財センター調査報告第241集 千原台ニュータウンVI - 草刈六之台遺跡 -』

(公財) 千葉県教育振興財団 文化財センター 2013 『千葉県教育振興財団調査報告第695集 千原台ニュータウンXXX - 市原市草刈遺跡(F区) -』

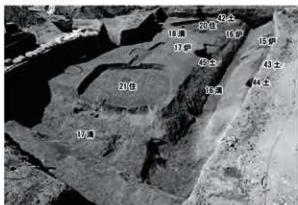


遺跡遠景（平成22年撮影 東から）



調査区近景（南から）

写真図版 2



第11調査区全景（北東から）



第12調査区全景（北東から）



第15号炉穴（南西から）



第16号炉穴（北から）



第17号炉穴（東から）



第43号土坑（南東から）



第44号土坑（南東から）



第21号竪穴住居跡（東から）



第 22 号竪穴住居跡 (南から)



第 22 号竪穴住居跡遺物出土状況 1 (南から)



第 22 号竪穴住居跡遺物出土状況 2 (南東から)



第 23 号竪穴住居跡 (南東から)



第 23 号竪穴住居跡遺物出土状況 1 (南西から)



第 23 号竪穴住居跡遺物出土状況 2 (北から)



第 23 号竪穴住居跡遺物出土状況 3 (北から)



第 23 号竪穴住居跡遺物出土状況 4 (南から)

写真図版 4



第20号竪穴住居跡（南東から）



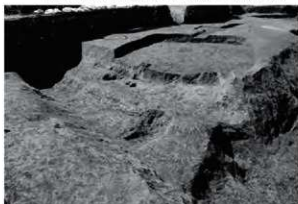
第20号竪穴住居跡遺物出土状況1（南東から）



第20号竪穴住居跡遺物出土状況2（北東から）



第16号溝状遺構（西から）



第17号溝状遺構（北東から）



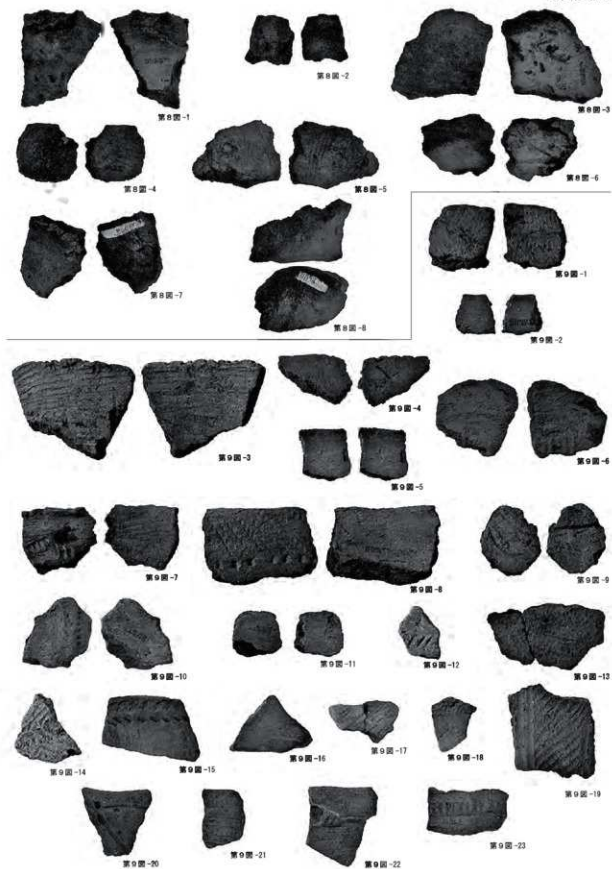
第19号溝状遺構（北東から）



第45号土坑（東から）

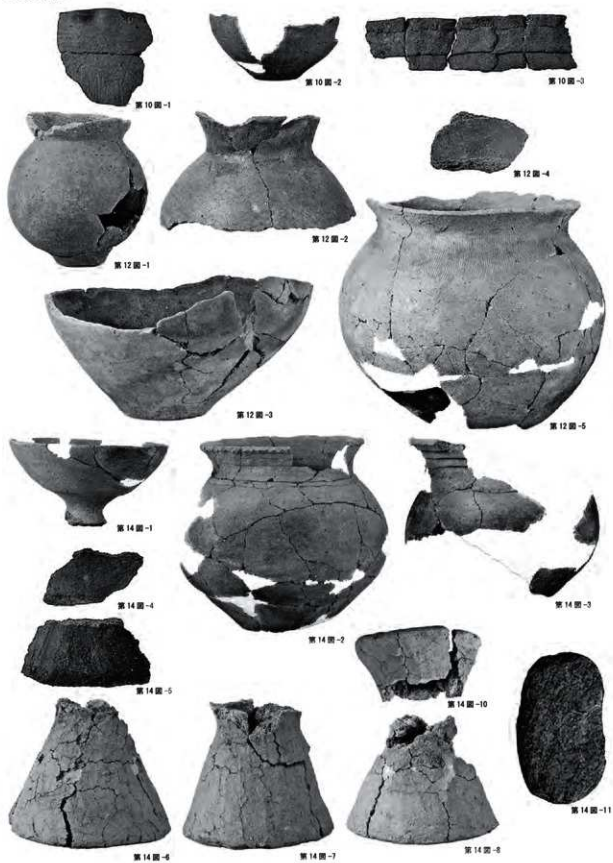


第46号土坑（南から）



炉穴・遺構外出土縄文土器

写真図版 6



第 21・22・23 号竪穴住居跡出土遺物





第15圖-12



第18圖-1

第18圖-2

第18圖-3

第18圖-4

第18圖-5



第18圖-6

第18圖-7

第18圖-10

第18圖-11



第18圖-8



第18圖-9



第18圖-12



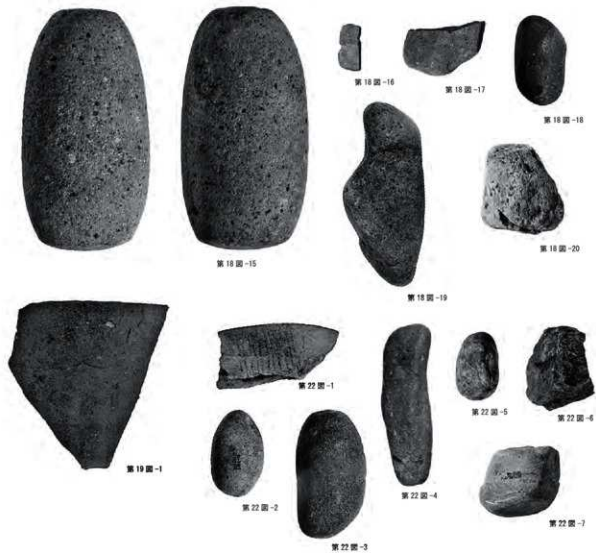
第18圖-13



第18圖-14

第23・20号竪穴住居跡出土遺物

写真図版 8



第20号竖穴住居跡・第17号溝状遺構・遺構外出土遺物

## 報告書抄録

ふりがな	ちばしむかえのだいいせきに						
書名	千葉市向ノ台遺跡Ⅱ						
副書名	宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書						
巻次							
シリーズ名							
シリーズ番号							
編著者名	塚原 勇人・小林 嵩						
編集機関	公益財団法人 千葉市教育振興財団 事務局 埋蔵文化財調査担当						
所在地	〒260-0814 千葉市中央区南生実町1210 埋蔵文化財調査センター TEL:043-2665433						
発行年月日	2016年3月28日						
ふりがな	ふりがな	コード		経緯度	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号				
向ノ台遺跡	中央区郡町 1117-30	12101	中央区 8	北緯 35° 36' 43"	20151001 ~ 20151027	250 m <sup>2</sup>	宅地造成
				東経 140° 8' 45"			
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項		
向ノ台遺跡	貝塚	縄文時代早期後葉	竪穴 3基 土 坑 2基	縄文土器 礫			
	集落跡	弥生時代終末期	竪穴住居跡 3軒	弥生土器	有角石器		
	集落跡	古墳時代中期	竪穴住居跡 1軒	土師器			
	居住域	中・近世	溝状遺構 3条 土 坑 3基	常滑壺			
要約	<p>1 縄文時代 平成21・22年度調査結果を合わせると、竪穴は、本遺跡の所在する台地の北側に広く分布していたと考えられる。</p> <p>2 弥生時代～古墳時代 平成21・22年度調査結果を合わせると、弥生時代後期から終末期と古墳時代中期の集落跡は、台地中央から北側にかけて展開することが考えられる。</p> <p>3 有角石器 弥生時代終末期の第23号竪穴住居跡の北西壁際から、有角石器が出土した。有角石器は全国で1495例、県内では27例が出土している。市内では、加曾利貝塚の西側周辺から出土した例があるのみで、本報告の資料が2例目となるであろう。</p> <p>4 中・近世 溝状遺構は堀跡と考えられ、平成21・22年度で検出した台地整形区画との関連するものと考えられる。時期を限定しうる遺物は出土しなかったが、先年度調査の結果から、概ね15世紀後半から16世紀代に相当すると思われる。また、覆土中から礫化面と宝永火山灰が認められたことから、後に堀底道として利用され、宝永年間には埋没していたことが考えられる。</p>						



## 千葉市向ノ台遺跡Ⅱ

～宅地造成に伴う埋蔵文化財調査報告書～

平成28年3月28日発行

発 行	行	有限会社 新井トラスト
編 集	集	公益財団法人 千葉市教育振興財団 事務局 埋蔵文化財調査担当 〒260-0814 千葉市中央区南生実町1210 TEL : 043-266-5433
印 刷	刷	株式会社 太陽堂印刷所 〒260-0843 千葉市中央区末広1-4-27 TEL 043-222-1122

